

# 総合型選抜 2024 年度過去問題 作業療法学科

次の文を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人について、慎重で思慮深く、真面目で、無謀な挑戦をしない、という類型が語られることがあります。私もそのように語ってきたという自覚があります。

ただ、こうした性質は生まれつきのものであると同時に、ある程度は後天的に影響を与える要素があることが知られてもいます。

〈中略〉

年々「子どもには罰よりも報酬を与えることが基本かつ重要」という考え方が正しいとみなされる空気が醸成されてきていると感じる人がほとんどではないかと思います。

たとえば、子どもがテストで良い点をとって帰ってきたら「本当に頭がいいね」と褒める、絵画で賞をとったら「芸術の才能があるね」と褒める、スポーツで結果を出したら「運動能力が抜群ね」と褒める・・・・・・・・。

このやり方は、一見正しいように思えます。

たしかに、いつも「いい子だね」と伝えて育てることで、自信に満ちあふれた幸せな子どもに育ちそうな気がするでしょう。実際、そういう教育を実践している人も多いでしょうし、意識的にそうしようと考えるはいなくとも、なんとなくそういう方向が正しいと感じて無意識的にそうしてしまっている、という人が少なくないのではないかと思います。

でも、このやり方に「一度も違和感を持ったことがない」という方は、意外と少数派なのではないでしょうか？

〈中略〉

実はすでに 1990 年代の終わりに、次のような実験が行われています。コロンビア大学のミュラーとデュエックによる研究です。

人種や社会経済的地位 (Socio-Economic Status:SES) の異なる、10 歳から 12 歳までの子どもたち約 400 人に、知能テストを受けてもらいます。

〈中略〉

テストのあと、実験者たちは解答を集め、採点を行います。が、子どもたちには実際の成績は秘匿しておきます。その代わり個別に「あなたの成績は 100 点満点中 80 点だ」と全員に伝えるのです。

〈中略〉

この時、テストを受けた子どもたちは、3 つのグループに分けられます。そして、成績以外に子どもたちに伝えるコメントを、次のように変えていきます。

◎グループ 1 「本当に頭がいいんだね」と褒める。

◎グループ 2 「努力のかがあったね」と褒める。

◎グループ 3 何のコメントもしない。

〈中略〉

実験では、子どもたちに知能テストの成績とコメントを伝えたあと、さらに課題を与えます。この場面では、ふたつの課題のうちからひとつを選んでもらいます。

ひとつは難しく、平均的な子どもたちには問題が解けないかもしれないという水準の難易度です。しかし、やりがいがあり、正解に至らなかったとしても何かしらを学びとることができるような課題です。

もうひとつはずっとやさしいもので、さくさくと解けてしまいます。ただ、そこから学べるものはあまりない、という課題です。

3つのグループに分けられた子どもたちは、ふたつの課題のうち、一体どちらを選んだでしょうか？

難しい課題を選ばなかった子どもたちの割合を表にして比べてみます。

〈中略〉

	操作	難しい課題を選ばなかった子の割合
グループ1	頭がいいと褒める	65%
グループ2	努力したねと褒める	10%
グループ3	何も言わない	45%

このあと、子どもたちにはもうひとつ課題が与えられました。今回の課題は非常に難しく、大半の子どもができないようにつくられています。子どもたちにこの非常に難しい課題の感想を聞き、家に持ち帰ってやる気があるかどうかを実験者たちは尋ねました。

ここでも、グループ間には大きな違いが表れました。「頭がいいね」と褒められたグループでは、ほかのグループよりも課題が楽しくないと答える子どもが多く、家で続きをやろうとする子どもの割合も少なかったのです。

(出典: 中野信子『空気を読む脳』, 講談社, 2020年, 124-131頁より引用, 一部改変, 傍点部分は加筆部分)

**問1** 筆者がミューラーとデュエックの研究結果を引用して述べたかったことを400字以内で要約しなさい(字数には句読点を含む)。

**問2** 筆者の考えについて、あなたの意見を400字以内で述べなさい(字数には句読点を含む)。